第３章　鬼が主人公！日本各地のあまんじゃく昔話③

今回、紹介する昔話は、岡山県の中央部にある美咲町（みさきちょう）に伝わるもので、何とかして夜空に浮かぶ星を取ろうとする天邪鬼の話です。

◆アマンジャクの星とり

【あらすじ】

“山国の秋は、またたくまにやってきました。たいくつしきったのはアマンジャクです。子どもまで、稲刈りやら子守りやら、てんてこ舞いなものだから、毎日ほんとにひとりぼっちで、ぼんやりくらすほかなかったのです。

「なんか、おもしれえこたあねえかなあ。」

つぶやきながら、毎夜のように、山中をのし歩いていました。

ある、月のない夜、アマンジャクは岩に腰かけて、杉のこずえごしに、両山寺（りょうざんじ）のてんつじ(いただき)あたりを眺めていました。空には降るような星でした。じっと見つめていると、目がチカチカ痛いようでした。

ほんとに、美作（みまさか）の空気は日本一よく澄んでいます。ようく晴れた昼間は、美作、備前、備中はおろか、伯耆、因幡、播磨……と、十ヵ国が見えるという両山寺でした。それに、秋の真夜中のことです。星のきれいなことったら！

不意に、アマンジャクがとびあがって叫びました。

「こりゃ、どうらいこっちゃぞ(すばらしいことだぞ)。うら(わし)ほどのものが、なんで今まで気がつかなんだんじゃろ。」

アマンジャクの思いつきったら、「お星を一つとってやろ」というのでした。

アマンジャクは、中でも目だって美しいソバマキ星に、ようやくねらいをつけて、お山をのぼっていきました。

「両山寺山は、村じゃいっち高いお山じゃけん、そのてんつじから手を伸ばしゃ、じきにとれらあ」と思ったのでした。そこで、エッチラサ、ホッチラサと、六八九メートルのてんつじめざして、白い息をはきはきのぼっていきました。さてのぼりきって、てんつじで、ウーンと背のびして手を伸ばしましたが、どうにもとどきっこありません。

「どねんしたろ。」

アマンジャクのやつ、ちっとばかりへこたれかかったものの、すぐにいい知恵が浮かびあがりました。

アマンジャクは、今度は垪和（はが）じゅうの石という石を一つ残らず、両山寺山のてんつじに運びあげて、一つ一つ積み重ね、夜空のお星めがけて、それはもうたいへんな高台を作ってしまいました。それで、「もうでえじょうぶ」と安心しきって、手を伸ばしましたが、どっこいやっぱりとどかないのです。さすがのアマンジャクも、これにはすっかりげっそりしてしまいました。

しかしそこは、何といってもアマンジャクのことです。何とか思いなおして、今度は山をおりて里へやってきました。何をおっぱじめるかと思ったら、林やら川原やら、あっちこっちとかけまわって、石を三つ四つ背負っては山をのぼり、またかけおりて石を背負い、山をのぼり、かけおり……そんなことをかぞえきれないほどくり返して、しまいには石灯籠から石地蔵、石橋まで、村中の石と名のつくものはみなかつぎあげて、今こそ夜空もつらぬけ、お星にとどけとばかり、めっぽう高い石塔を積みあげてしまいました。

勝ちほこったアマンジャクは、胸をわくわくさせて、その塔をのぼりきってててんつじに立ち、ひょいと、目と鼻の先のソバマキ星に手を伸ばしました。ところが、これはいったい全体、なんということでしょう。ソバマキ星まで、あともう杓子（しゃくし）の柄の長さだけ手がとどかないのです。あわを食らって、爪先で立ち、背伸びしても、やっぱりだめなものはだめでした。そうこうしているうちに、一番鶏はときをつくる、東の空は白む、いよいよあわてくらったアマンジャクは、さか立ちしてみたり、とびあがってみたり、しまいにはすっかりやけくそになって、石塔の上でじだんだを踏んでしまったのです。そのとたんでした。

ドド　ドドドッ！

村中の石を重ねた塔がいっぺんに崩れ、白みかけた谷をとどろかしてまっしぐらに落ちていきました。

両山寺山の横路には、今でも大石小石が、てんつじから谷底まで、ごろごろしています。これなんですよ、そのときアマンジャクが崩した、星とりの石というのは。

ところで、アマンジャクはというと、これはまたかわいそうに、仏さんに叱りとばされ、仁王さんに踏んづけられてしまった“

(稲田浩二編.(2016 年).「岡山の民話」.未來社.110-113 頁より引用)

【解説・コメント】

1　話の舞台は、岡山県美咲町の農村で、季節は秋の稲刈りのころです。

天邪鬼の遊び相手の子どもたちは、稲刈りのお手伝いに出ており、天邪鬼は退屈で仕方ありません。夜、空を見ると、星が降るようです。

天邪鬼は、夜空に浮かぶ星を取ってやろうと思い立ち、両山寺山（＝二上山（ふたかみさん））の頂きに石を積み重ねますが、届きません。悔しくてじだんだを踏んだところ、せっかく積み上げた石の塔が崩れてしまいます。最後には仏様に叱られ、仁王に踏んづけられてしまうというオチのついた、間抜けで少し切ない昔話です。

2　この話は、先に紹介した『橋杭岩の伝説』と同様、地域の自然と密接に関連しています。

⑴　まず、降るような星空です。稲刈りの頃は大気中に水蒸気が少なく、空が澄んでいます。その上、岡山県美咲町はかつて環境庁（現環境省）による「星空がきれいに見える地」として全国で上位 9 番目にランクされたこともある所です。文中の「目がチカチカと痛いような」星空が目に浮かびそうです。

⑵　次に、その星空の中で目だって美しい「ソバマキ星」です。これは、すばる（＝昴、おうし座のプレアデス星団）を意味する岡山県の方言で、「すばるが中空に達する時期を目安に蕎麦（そば）の種を播いた」[1] ことがその名の謂（いわ）れだそうです。

すばるは、冬の星空の中空に群れている、一見、6～ 7 つほどの集まりに見える星団で、平安時代、清少納言が枕草子の中で「星は昴、彦星･･･」と、一番に推奨した星です。望遠鏡で見ると、星の総数は実際には 100 個とも 200 個ともいわれています。[2]

アマンジャクが「星とり」を試みた稲刈りの頃は、ちょうど青白く見え始める時期と重なります。

⑶　最後に石です。天邪鬼が星をとろうと積み重ねた「星とりの石」は、火山岩である安山岩の岩石群で、「あまんじゃくの重ね石」、「あまのじゃく岩石群」、「天邪鬼岩(あまのじゃくの岩)」の名で伝承されています。この昔話の舞台となった両山寺周辺の外、美咲町角石祖母（ついしそぼ）、久米南町羽出木（はでぎ）に点在しているとのことです。

美咲町の北西に位置する真庭市の北部には数 10 万年前に大山や蒜山（ひるぜん）から噴出したマグマが固まってできた安山岩が分布しており、二上山の安山岩を母岩とする土壌もその噴火と関連している可能性があるそうです。[3]

3　次に、『コラム①“天邪鬼”、その正体は・・・』で挙げた、あまのじゃくの 5 つの特徴と照合すると、 3 つの特徴が該当あるいは似ているかなと思います。

箇　所		天邪鬼の特徴
星をとろうとする（＝天に対抗）	➡	ア　神や人に反抗して意地が悪い
石塔が崩落し、最後は仁王に踏みつけられる	➡	イ　最後には滅ぼされる。脇役
星とりという、不可能なことに挑む	➡	ウ　憎らしい反面、おかし味がある

この天邪鬼の独自の特徴としては、石灯籠から石地蔵、石橋まで山の頂きに担ぎ上げたという怪力ぶりを挙げることができるでしょう。

4　地元には別の筋の話として、「昔、両山寺に棲んでいた天邪鬼が下界が嫌になって天に昇ろうとして、付近の岩や石を高く積み上げた。もう一歩で、ちょうど杓子の柄の長さだけほど積めば待望の天に届くという時に岩が足りなくなって地へ降りた。このときを狙っていたのが、日頃から仲の悪かった両山寺の天狗である。こんな憎い代物に昇天されたら、大騒動が起こるに違いないと、天狗は自慢の鼻でエッとばかりに積み上げた岩の塔を突き崩してしまった。」(4) という話も伝承されているようです。

5　先に紹介した『うりこ姫とあまのじゃく』の話には「蕎麦の根が赤くなったのは天邪鬼の血のせい」との謂(いわ)れ話が登場します。今回の昔話にも「ソバマキ星」が登場することを考えると、昔は蕎麦という食べ物が、今と比べて人々の食生活により身近だったのだろうと思います。

(1) 世界大百科事典 https://kotobank.jp/word/より引用
(2)国立科学博物館https://www.kahaku.go.jp/exhibitions/vm/resource/tenmon/space/nebula/nebula02.html を参照。
(3)美咲町史編さん委員会.(2018 年).「中央町誌　地区誌編」.美咲町.896,1278-1279 参照
中央町文化財研究会地名調査委員会.(1991 年).「中央町の地名考」.中央町文化財研究会.366 参照
岡山県森林インストラクター会・自然観察会実行委員会.(2020 年).『岡山県森林インストラクター会 自然観察会　第 10 回』.岡山県森林インストラクター会.12-21 参照
なお、両山寺周辺の岩石群の資料は、岡山県立図書館郷土資料班の方にご尽力いただきました。
(4)美咲町史編さん委員会.(2018 年).「中央町誌　地区誌編」.美咲町.P975 より引用